

グレスナー邸にみる19世紀末アメリカの生活空間

杉山 恵子

The Glessner House: Negotiating Domestic Space at the Turn of Nineteenth Century America

Keiko Sugiyama

Abstract

American architect, H.H. Richardson designed the Glessner House (1885-1887) in Chicago for the industrialist, John J. Glessner. First, I will argue that the House was important in terms of its collaboration with the architect and client for making an ideal residence. Then, I will present how space in this House was actually negotiated between wife and husband, and boundaries were drawn between master and servants. The introduction of the Arts and Crafts Movement played a crucial role for the wife to use these spaces for her public purposes. Finally, I will show that during the 1930s and the 40s, Frances Glessner Lee, the daughter, made crime scene doll houses for police detective training. Her anger towards domestic violence, and her strong desire to eradicate it, are represented in the dolls as victims. Her construction of the doll houses, thus, was far from the ideals of her father. Examining the Glessner House presents a key for a deeper understanding of dynamism of social class and gender at the turn of century.

Keywords: The Glessner House, Henry Hobson Richardson, Arts and Crafts Movement, Frances Glessner Lee

キーワード：グレスナー邸，ヘンリー・ホブソン・リチャードソン，アーツ・アンド・クラフツ運動，フランセス・グレスナー・リー

はじめに

本論は19世紀後半のアメリカを代表する建築家のひとり，ヘンリー・ホブ

ソン・リチャードソンが最後に手がけた都市住宅を取上げている。その施主家族を追い、複層的な空間利用の展開を検討するものである。リチャードソンは勃興するアメリカを代表する建築家でありながら、英国発のアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を色濃く受けていた。英国において社会改革を求めたその思想と実践は、アメリカでは、「矮小化された環境主義」に陥ったと多くの歴史家が語ってきた¹⁾。社会改革の思想がそぎ落とされ、安全に、美しく暮らす環境作り、ことに住宅内環境とそれを可能にする消費行動に帰結したとするものである。しかし「矮小化された環境主義」と単純には結論できない複雑さをグレスナー邸は見せている²⁾。本論では建築・デザイン史とは異なった視点で、男女、階級の違いによる居住空間利用のダイナミズムを見ていきたい。

19世紀に代表的であったヴィクトリアン時代の家を建てることを建築家リチャードソンと共に拒み、新しい都市住宅の建築に臨んだのは新興成金の施主ジョン・J・グレスナーであった。当時の新しい思想的潮流であったアーツ・アンド・クラフツ運動をいち早く取り入れ、妻フランセスはそこで主導権を發揮した。図書室をはじめ、当時男性領域とされていた居住空間を妻主導の公の場とした。グレスナー邸内部の公的役割と私的役割の区分、混沌とした男女役割区分こそ、この邸宅を見ていく上で特徴的なものである。本論の最後では使用人たちの反乱に言及し、階級差への問題点を取上げている。またグレスナー邸で育った娘はのちにアメリカ史上初となる法医学教室をハーバード大学に導入した。住宅模型を使った犯行現場をつくり、警察官を訓練する方法を開発した。そこには、自宅に酷似した手作りの模型が並び、「安全で美しい」はずの住空間は殺人現場に仕立てられ、理想の家庭像へのあからさまな抵抗を見せている。

グレスナー邸は、アナキストが仕組んだとシカゴを震撼させた爆破事件現場、ハイマーケット広場までわずか5ブロックの立地である。緊張を孕んだこの地のグレスナー邸が、複雑な世紀末アメリカの縮図とそのダイナミズムをみせていることが見えてくるだろう。

I. 建築家リチャードソン（1836—1886）と施主ジョン・J・グレスナー（1843—1936）の邸宅

シカゴのプレイリー（大平原）通りはその名の示すように、アメリカの大平原への入り口だった拠点シカゴの歴史をその名に残している。なんといてもこの通りを有名にしたのは、近代生活に象徴的な、二つの業種、シカゴを拠点に合衆国全土に高級鉄道車両を走らせたジョージ・プルマンと人々の消費行動を変えた巨大デパート王、マーシャル・フィールドら大富豪たちが、ここに居を構えてからのことだろう。この通りの住人に、のちにインターナショナル・ハーベスターとなる農機具メーカーの経営者、ジョン・J・グレスナーが1887年に加わった。たちまち、リチャードソンの設計による邸宅の斬新さが通りの住民たちに物議をかもした³⁾。

しかし、近隣の非難に施主は怯むことはなかった。建築家リチャードソンをいかに信頼していたかは施主自身が幾度となく邸宅に言及した中で語っている⁴⁾。新興産業家にとって、それまでの成功者の邸宅とは異なるヴィジョンを探していた。新しい感覚を求めていたのである。当時シカゴを中心に広がりを見せていた、英国発のアーツ・アンド・クラフツ運動に傾倒していた。それは、19世紀後半の社会の変化に動揺した人々にとって、いっぼうで英国への絆、アメリカの初期の伝統を思い起こさせも、また揺らぐ宗教にかわる、道徳観を人々に呼び覚ました。中世回帰を伴うその考え方は宗教心を支えてくれるものであったからである。社会改革をその根底に掲げていたことも、広がる貧富の差で不安を抱え、拠って立つところを探していた人々に新しい息吹を感じさせるものであった⁵⁾。

しかし、世紀末の熾烈な産業競争を体験しているグレスナーには、産業主義の弊害を訴え、社会主義運動を支援した英国流のアーツ・アンド・クラフツ運動の社会変革の側面に思い入れはない。自身が大量生産の只中にいた反動からか、産業革命以前の手仕事に憧れ、ロマンティックな自然回帰に惹かれていた。中世回帰に、道徳心の拠り所を見出していた。グレスナー家が見出し、支援した家具職人アイザック・エルウッド・スコットの作り出す作品はそうしたゴシック回帰を象徴するデザインだったからである⁶⁾。

成功を手にしたグレスナーはシカゴの一等地に打って出ることを考えた。新参者としてこの地に移り住む相当の覚悟が感じられる。プランの最終段階の1886年5月4日にヘイマーケット事件が起きている。けたたましい馬車の音や逃げ惑う群集の記録に加えて、妻フランススが残した日誌にはまさにその日にリチャードソンの設計を決断する記述が残る⁷⁾。城壁のような完璧な外観は外部の侵入者を拒み、まさに危機的状況を予測し、身を守るように、すでに設計されていたからだろう。しかし、グレスナーが新居のプランで絶賛したのは、外壁の堅固さではなく、むしろ、プランの「シンプリシティとプロポーション」において、他の追隨をゆるさないということからであった。妻のフランススも同様の賛辞を贈っている⁸⁾。

そもそも、リチャードソンはそれまでどのような建築を手がけてきた人物なのだろうか。リチャードソンは1838年、南部ルイジアナの裕福なプランテーションに生まれた。大学は北部、ハーバード大学へと進み、さらに、パリ、エコール・ド・ボザールに留学した。アメリカでは建築が学べる場所がどこにもなかったからである。その間にアメリカで南北戦争が起こる。戦争による実家の破産は勉学意欲に拍車をかけた。イタリア、スペインをはじめヨーロッパを旅して、あらゆる建築様式を学んだ。彼の後継者には古典主義を復活させ、その壮大さでアメリカを一世風靡したチャールズ・F・マッキムやスタンフォード・ホワイトの名が挙がる。またリチャードソンの手によるマーシャル・フィールド卸問屋のデザインをみて、即座に設計図を書き換えたという逸話が残る、次世代のルイス・サリヴァンまでもが強い影響を受けた。まったく異なる潮流を後に残したりチャードソンは、ヨーロッパ建築を自在に移植して、アメリカ化する道を主導してきた19世紀アメリカ建築界の忘れられた巨人なのである⁹⁾。

リチャードソンの代表作の一つは、ボストンのトリニティ教会（1872）である。同時に大学校舎や、各地の図書館、ニューヨーク州庁舎（1876）、ピッツバーグのアリゲニー裁判所と監獄（1884）といった19世紀後半のアメリカの政府系建物を多く手がけた。「アメリカの自由と責任感」を象徴する建物を設計した建築家という評価さえある¹⁰⁾。さらに、48歳で急死したため叶わなかったが、夢は小麦収穫のグレイン・エレベーターの設計であったとい

う¹¹⁾。教会に始まり、政府関連建物、さらにアメリカの未来の産業建築を望んだとすれば、きわめてアメリカの発展を象徴する建築家であったことが重要であろう。新興産業家グレスナーが引かれていた理由がそこにみえる。

施主のジョン・ジェーコブ・グレスナーは1843年、オハイオ州ゼインズヴィル (Zanesville) で生まれた。父親はオハイオ州議会議員を務めたこともある。ジョンは父の起こした、ゼインズヴィル・タイムズという新聞社を手伝っていたが、1863年スプリング・フィールドに移り、農業機械を製造するビジネスに加わった。1868年には下宿で出あった大家の娘、フランセス・マクベスと結婚した。直後の1870年にシカゴに移り、ビジネスをさらに拡大し、その後、刈り取り機をめぐる凄まじい企業競争を経て、1902年にはインターナショナル・ハーベスター社へと合併、副社長にまで上り詰めた。西部開拓地に農業機械を提供することで成功を手にした、まさにアメリカの夢の実現者であった¹²⁾。

グレスナーは1885年に、当時ボストンを拠点にしていたリチャードソンを訪ねて意気投合したという¹³⁾。「プランが気に入らなければ、いつでも破り捨てればよいことだった。」と高飛車に語る施主であったことから¹⁴⁾、建築家と施主の共同作品である点を本論では重視している。しかもリチャードソンの最後の設計であり、完成を待たずにリチャードソンは急死している。

グレスナーの手記にはリチャードソンのユニークさを伝える逸話が多い。角地の敷地を訪ねた折には、即座に窓を排したアイデアが浮かび、一晩で下書きを書いたという。また、妻フランセスの日誌にはリチャードソンが始めて旧宅を訪ねた折の記述が残る。ピアノ用のスツールにしか座れなかった巨体のリチャードソンに言及し、辛らつにも建築以外の話題のなさに失望したと記している。その折、リチャードソンが図書室の暖炉の上に置かれていたオックスフォードの古い修道院、アピングドン修道院、の写真に目をやり、借りていったことを記載している。「これを新しい家の基調にしたい」と述べたという。この修道院はジョン・ラスキンが好んだアーツ・アンド・クラフツ運動のシンボルであった。依頼者の好みを即座に見抜いたリチャードソン神話ともいえるものだろう¹⁵⁾。

以降、アーツ・アンド・クラフツ運動のイメージをふんだんにとり入れた設計が、その「シンプリシティとプロポーション」において、このグレスナー夫妻をうならせたのである。リチャードソンは1882年にイギリスでウィリアム・モリスやウィリアム・ド・モーガンを訪ねており、以来、装飾においてかれらの崇拜者であった。こうして、シカゴにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の導入において、先駆的役割を果たすグレスナー邸は、建築家と施主の結びつきから生まれるのである¹⁶⁾。

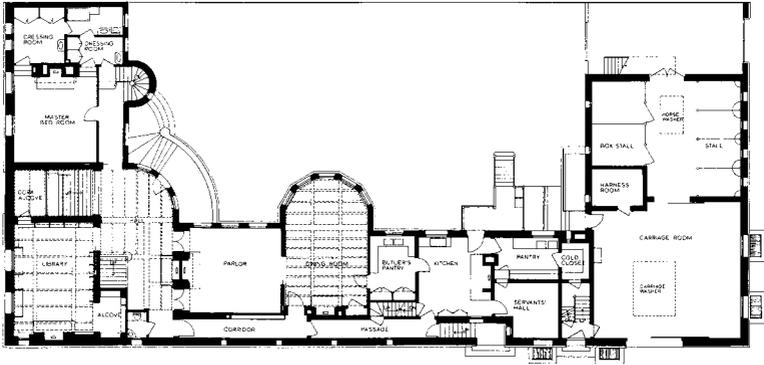
グレスナー邸には当時の住宅に特徴的な玄関までの進入部はない。敷地全面を覆い隠す御影石の壁面は大地から立ち上がるように積み上げられている。リチャードソンの力量といわれる、ヨーロッパとアメリカの折衷をみせるのは、玄関の佇まいであり、リチャードソン建築に特有のアーチがかかる。薄いオレンジピンクの御影石、それが石造りでなければ屋根の作りからもニューイングランド地方に特徴的な、マッチボックス建築を思わせる。

入り口を入り、風除けのための階段を上ると、回りが見渡せるホールに着く。上に続くその階段の上までも見渡せる開放感だ。目立たないが、特筆す



East facade of Glessner House, ca. 1888

ジョージ・グレスナー撮影による1888ごろのグレスナー邸
The House at 1800, Prairie Avenue, Chicago, The Chicago Architecture
Foundation



一階平面図

Elaine Harrington and Hendrich-Blessing, *Henry Hobson Richardson: J.J.Glessner House*, p.21

べきはこのホールの暖炉を囲む木製の飾りが、初代財務長官アレキサンダー・ハミルトン邸のものだったことだ。また上階へ続く階段の手すりを支える支柱はロング・フェロー邸のデザインを模して彫刻されている。隠れたところのこうした仕掛けはアメリカの伝統回帰への強い思いを伝えている¹⁷⁾。

ホールのカーブは自然に導線を描き、右手のパララー、ダイニング・ルーム、図書室へと続く。ここでも連続して遠く見渡せる仕掛けが施されている。どの部屋もヴィクトリアン建築では男性の支配域とされている¹⁸⁾。そこに連続性を仕掛けたりチャードソンと受け入れたジョンのコラボレーションの成果である。

一方、客人の侵入を退けた入り口左手のウイングは家族の居住区が集中している。地下から二階まで、学習室、主寝室、子供の寝室である。病弱だった息子は家庭で教育を受けた。学習室はその息子と、ともに学んだ娘のための空間として独立している。私的空間と隔て、開放感に満ちた客人を招き入れる空間を作り上げ、どのように使用しようとしたのであろうか。

晩年、夫のジョンはある婦人からかけられた言葉を引用した。「あなたは

文化的にこの町に多大な貢献をされた。でもそれは奥様とこの邸宅があったことでしたよ」と。グレスナーはすかさず、これほどうれしかったことはなかったと記している。その妻を選んだのは自分であり、その邸宅を建てたのは自分だからだ、と¹⁹⁾。この言葉ほど雄弁に夫のこの邸宅への支配の構造を物語るものはないだろう。しかし、フランセスが残した日誌からは自信に満ちた傲慢な夫の言葉とは裏腹に自由に室内の空間を使いこなし、主導権を握るフランセスの姿がうかがえる。なにより、フランセスが記録する日常の活動記録は図書室の机におかれ、向かい合った形で置かれた椅子はここが夫婦の共有空間であることを物語っている。フランセスはどのように新しい居住空間を利用していったのであろうか。

II. フランセス (1848-1932) の邸宅

ジョンが教会建築を思わせる外壁で家人の道徳性をアピールし、同時に砦のような閉鎖性で安全を確保したのなら、妻の役割は、アーツ・アンド・クラフツ作品による内装を担っていったことだ。フランセス・マクベスは1848年オハイオ州アーバナ (Urbana) で生まれた。父親は2歳のころに事業に失敗して、カリフォルニアの鉱山に一攫千金を夢見て旅立ったという。残された妻子は1849年、母方の祖父を頼り、スプリング・フィールドに移った。フランセスはピアノの素養を身に付け、教員をしていた時期もある。人の移動が激しい中西部の町で、フランセスが母の簡易旅館を手伝っていた折の宿泊客がジョンだった。当時としては珍しく、対等な関係での結婚であったという評価だ。二人で向上心を支えあった。夫と前述のスコットの作品を支援しながら、アーツ・アンド・クラフツ作品のコレクターとしても次第に知られるようになっていった²⁰⁾。

当時アーツ・アンド・クラフツ運動の潮流がシカゴで持て囃される一方、新興産業家階級によるコレクションはその行く先を暗示していたともいえる。追い上げる下層階級との差別化を意識した、消費行動に走るようになるからである。それは美しい家を建てよう、美しい調度品を揃えようとする強い願いに表れていた。自宅に今も残る『ハウス・ビューティフル』等の雑誌が彼らの選択眼がどのように鍛えられたかを教えてくれる。1896年に創刊された『ハウス・ビューティフル』はアーツ・アンド・クラフツ運動の初期の

思想を削ぎ落とし、美術品の消費を促す傾向を生んだといわれる雑誌である²¹⁾。推奨されるジャポニズムの影響を受けて選んだ東洋の品々、陶器やガラス製品、ウィリアム・モリスやウィリアム・ド・モーガンの工房に直接頼んだカーペット、壁紙、タイル。蓄えた富を使って、フランセスはその住空間をデザインしていった。

重要なのは、この建物が、グレスナー家の冬の住まいであったことだ。南側に開かれた構造は、光を取り入れることに細心の注意がなされた結果であった。南側の外壁に使われた素材も日の光を浴びた効果がねらわれ、滑らかで軽い煉瓦、そして地元の石灰岩が選ばれている。丸みを演出する塔には旧宅から苗を持ち込んだ蔦を這わせた。

外壁だけではない、内装もダイニング・ルームやパーラーには、黄色の天井、壁紙が使われ、ガラスで取り込んだ外の光を柔らかくに反射する効果が期待された。またウィリアム・モリスの特徴である、植物柄は冬の枯れた自然を補うために、溢れんばかりの花柄や緑を再現するものが使われた。無駄な装飾を排し、日常的に用いることを旨として、選択眼がいかされた²²⁾。



グレスナー邸中庭
本著者撮影

さらに、フランススの本領はこうした夫の財産によって、アーツ・アンド・クラフツ運動の知識を磨き、実践していった点だけではない。シカゴ万国博覧会後にシカゴ大学総長ウィリアム・ハーパー（William Rainey Harper）に依頼されて、持てる知識を披露し、教授するクラブ活動を始めたことである。ハーパーはシカゴ大学に全米各地から集る教授の、その夫人たちがシカゴ社会に受け入れられるようにと指南をフランススに頼んだのである。「月曜朝の読書会」と名づけられた、フランススの自宅における活動はのべ80人近くが集り、40年もの長きに渡って続けられた。最初の一時間はおもにアーツ・アンド・クラフツ運動に関する勉強会やベストセラーも含めた読書会、次の一時間は講演者を招くこともあれば、集った人々の歓談で進められた。ことに一時間目は夫人たちが自分たちの手で刺繍作品を作りながらフランススの講義を聞いたのだった。実際、部屋の装飾にはフランススの刺繍作品が東洋趣味で集められた日本の布にまじって、飾られ、また日々使用された²³⁾。

本来主人の居城とされる図書室で毎週開かれたこの「月曜朝の読書会」は、フランススが男性領域を使用し、また客人を集めて女性領域にしつつ、自立するみずからの活動の拠点にするさまを見せている。決してフランススはフェミニストではなく、参政権にも反対であったが、こうした女性クラブが女性たちの社会性を培ってきたことは多くの研究が伝えるところである²⁴⁾。図書室が実は男性領域を象徴して始まっていたことを伝えるエピソードが残る。ワシントン通りの旧宅の暖炉からその灯火を絶やさずに持ち運び、儀式のようにこの図書室に移すことをもって、ジョンはこの家の始まりを宣言していた。家主としての誇りを象徴的に書き残している²⁵⁾。その家父長支配の象徴的な儀式の場だったものを、男女役割をくずす空間となってその後この建物の中で利用されていった。ここで孤児院や病院に寄付する品々が次々と作られ、第一次大戦期は兵士に贈るセーターがこの室内で編まれた。女性達の活動拠点として機能する役割を果たしていたのだった²⁶⁾。

当時の建築には、男性領域とされた三つの部屋がデザインされていた。まずは社交の中心を占めるパーラー。次に客人と食事をする際に家人の権力を誇るダイニング・ルーム。そこでは素材さえもが硬材のオークを使うことで



ダイニング・ルームからパーラー，図書室を見渡す
Harrington and Hendrich-Blessing, p.43.



図書室

Harrington and Hendrich-Blessing, p.38.

男性性が強調されていたとされる。さらに図書室とは名ばかりでその富を象徴する装飾空間として誇示された図書室である。一方、夫人たちの居場所は寝室と、女性の友人たちを受け入れる控えの間（ドロイングルーム）に限られていた。よく知られる男女の領域は精神世界だけではなく、居住空間でも見事に分かれていた²⁷⁾。

しかし、フランススは図書室という本来男性の空間とされていた場所に変革を齎し、パーラーの使い方にも変化をよんでいた。パーラーはニューイングランド地方の家の建て方に由来するといわれている。初期の入植者たちが建てた酷寒の北部の家は中央に暖炉を配置し、玄関からそこに通じる空間がパーラーと呼ばれる客人を招き入れるところだった。教会を中心とした共同体を誇ったこの地方には公共の場を共有する仕組みが室内にも設けられたのであった。以来家庭と外を繋ぐ重要な場を提供してきた。客人を招き入れる中心であり、男性の家庭内支配地域のひとつであった²⁸⁾。

そのパーラーがグレスナー邸では妻フランススのピアノの間となり、女性の公の活動空間となっていたのである。さらに、活動の中心を図書室に移し、妻の客人を招き入れるという形で使用された。柔らかな日差しが入り、花々の装飾で飾られたダイニング・ルームももはやヴィクトリアン期の男性支配のダイニング・ルームの様相を呈していない。ひとつつながりになって見渡せる開放的な空間を担っている。夫が「オープン・ハウス」とまで呼んだ活発な交流が、抑制のきいたアーツ・アンド・クラフツ作品の装飾に囲まれ、開放感あふれる室内の空間のなかで行われていたのである²⁹⁾。

グラスナー邸が見せるのは、男女や公私のそれまでの関係性を問い直す力を持っていた側面である。また家庭が外への啓蒙の場として、女性主導で公と私がつながっていた場ともいえる。19世紀特有の男性領域、女性領域の二分化の再考を促すものでもあるだろう。建築構造と思想においてアーツ・アンド・クラフツ運動が可能にした点がここでは重要に思われる³⁰⁾。

Ⅲ. 召使たちの邸宅

自宅に活動範囲を得て、フランススが展開した新しい行動様式は、シカゴ

でのアーツ・アンド・クラフツ運動の齎した新しい側面を見せたといっているだろう。しかし、慈善活動の数々、自主活動の数々を通してのシカゴへの文化的貢献も、男女役割に変革を齎す夫婦の新しい関係も、召使との間ではうまくいっていなかったようだ。二人の子供をかかえ、毎週何十人もが集う、時には支援していたオーケストラのメンバー全員が食事をしたとも伝えられる。使用人なしではとても成り立たない生活だったろう。では使用人たちはどこにいたのか。

平面図を見て驚くのはその面積の半分が使用人用で占められていることだ。使用人の居住区はブレイリー通りに面した正面入り口からは一番遠く、建物の奥にある。入口も別だ。地階が洗濯場、一階が台所と食料庫、二階がかれらの寝室であった。当時の清潔への関心を反映して、輝くばかりの白いタイルの台所、高級な食器を洗ったであろう銅製の流し台、客人使用の食器が並ぶ食器棚が印象的だ。そして家人からは決して使用人たちの動きが見えないように、サービス専用の長い廊下が仕組まれている。また光溢れる中庭には使用人が過ごせる場所はない。同じ建物の中において、見事にその階級差が仕組まれているのである。

頻繁に外出するグレスナー家にとって不可欠の御者、そして執事。女性の使用人は料理人、洗濯婦、家事一般をこなすメイド、夫人専用のメイドら合計6人が常駐していた。それぞれ個室があてがわれていた。フランセスはリチャードソンに女性の個室にクローゼットを設置するように注文をつけた。これも即座に設計図を修正してクローゼットを配置したというリチャードソン逸話として語られてきたが、各部屋に召使専用のクローゼットを設置することは当時としては稀な、女主人の気遣いであった。しかし、同時に使用人の生活管理を担う女主人の姿勢を見事に表している。さらに共有するシャワールームも二箇所しつらえられていた。恵まれた住み込み空間を与えられていても、彼らが24時間勤務を強いられていたことには変わりはない。邸宅の外に出る機会といっても、子供たちを遊びに連れ出す折や、用事を伴った外出が多かったからだ。一見解放されるかに見える外出も自由時間ではなかった³¹⁾。



サービス廊下
本著者撮影



召使部屋
本著者撮影

1870年にシカゴに移ってから、1907年までに、100人もの使用人を雇っていたという。そのほとんどが1年以内で入れ替わり、核となる使用人でも4-5年をめどに入れ替わっていた。雇い入れていたのが、結婚すると住み込みから離れる未婚の女性達が多かったことがこの入れ替わりの激しさを物語っている。平均週\$3.25ドル、当時の劣悪な環境の工場労働に比べて解雇も少なく、食事と住まい付きの安心が確保できる仕事だったといわれる³²⁾。

フランスに雇われたのは、ほとんどがアイルランドからの移民女性であった。また新聞にも求人広告を出した。シカゴ・トリビューンやドイツ語圏の人々を対象にしていた新聞だった³³⁾。白人の使用人を探すのが困難であったのか、あるいは、通常は人づてに得られる使用人の採用が叶わず、切迫した人手不足を意味していたのかもしれない。

グレスナー夫妻と使用人たちとの関係を象徴するのは1891年の夏に全員が大挙して暇を申し出たことだろう。使用人を連れて出かける、ニュー・ハンプシャーの別荘で齟齬は起きた。日誌での記述は以下のようになっている。

フレデリック（執事）が他の5人すべての署名のある文書を手に、給料の支給が済み次第、全員がやめたいと来ていると来てきた。ジョンは支給額の計算を済ませた。フレデリックとジェームズの二人が町で荷車と年老いた馬を手に入れ、各々のトランクを乗せ、全員6時に家を出た。旅費は持たず、給料のみ手にして出て行った³⁴⁾。

淡々とした記述からフランスの思いを読み取ることは難しい。しかしこの間の事情を推測できる、メイドからの手紙が残る。

以下はエマ・シニガーというメイドのひとりがフランスに宛てた手紙である。長年仕えたにも拘らず、食品の横流しや無許可での馬車使用、無断外出の濡れ衣を着せられたらしい。濡れ衣を着せた管理人や雇い主フランスへの痛烈な思いが綴られている。

問題が起こっているのを知りながら、奥様は見過ごしてこられたのです。

私たちの言い分を聞かずにウイリアム氏（別荘の管理を任されていた人物）と御者の言い分だけを聞いたのが悪いのです。…奥様にお気持ちさえあれば、（全員の暇は）防げたのです。なぜ（私たちが事情を説明する）機会をくださらなかったのですか。

さらに続く。

奥様は私が余計なことを外で話したと思っておられますがそれは違います。…奥様には誠実に仕えてまいりました。仕事も懸命にしていまいりました。決して奥様を裏切るようなことはしておりません。仕事仲間を裏切ることもいたしておりません。仲間を裏切りながら、奥様に忠実であることなどどうしてできましょう。私は私と同じ出自のものから、友人を選んできました。奥様のためとはいえ、友人を裏切ることなど出来ません³⁵⁾。

具体的に何が起こっていたかよりもここで吐露された心情は決して偽りではないだろう。使用人との境界を越えることが出来なかったフランススをこれほど告発する言葉はない。そしてあれほどまでに明確に仕切られた中で生まれた、使用人たちの団結心をも垣間見ることが出来る。

別荘地での規律を記し、使用人に配布された冊子『ザ・ロックス』（巨岩荘）には、食事時間の厳守をはじめ、役職ごとに厳密な指示が記されている。シカゴにおいても冊子こそ残ってはいないが、厳しい女主人の側面をみせていたことをうかがわせる。たとえば、幼い息子と娘を敬称で呼ぶように言いつけ、拒んだメイドが辞めていく記述も日誌には残る³⁶⁾。

夫との生活空間ではそれまでの境界を乗り越えたフランススが、決して譲らなかった使用人との境界。リチャードソンの設計によるこの家は19世紀を終え、20世紀に向かうアメリカの都市住宅の新しい試み、それが促す変化と、引きずる階級差を見事に象徴していた。外から護るようにつくられた内部の空間に、使用人たちを入れることを拒んだグラスナー夫妻だったのだ。外界から隔離された中で、更なる使用人の徹底した隔離。それは刻々と変化している都市では機能しない危うさを露呈させたといっているだろう。抑圧さ

れた思いが遠くニュー・ハンプシャーの別荘の空間で爆発した事例はかえってこの城壁に囲まれた邸宅の抑圧の重さを物語っている。道徳観を見せ付けた教会建築のような石壁はむしろ、これもリチャードソンが得意とした牢獄建築を思わせる結果となってしまったのだった。

IV. フランセス・グレスナー・リー（1878—1962）の邸宅

グレスナー邸の隔離された空間に関しては、もう一か所、言及しなければならない。石格子のまぐさ窓の、半地下の子供部屋である。病弱な長男ジョージを気遣って、教育は妹のフランセスとともに、家庭教師を呼んで行われていた。のちに、特異な人生を歩んだフランセスはこの家の極端に閉鎖された家庭環境の負の遺産が生んだ人物とされた。その証拠が彼女の導入した犯罪捜査におけるドール・ハウスの利用だというのである。閉鎖された空間から逃れられなかった妄想が室内の犯罪現場作りという異常な作業に結びついていったと仮定するものだ³⁷⁾。

「ファニー」の愛称で呼ばれたフランセス・グレスナー・リー（以下リー）の経歴を見てみよう。利発な子であったようだ。フランセスの日記には息子のジョージについては授業の成果や成績の記載が多いが、娘に関しては質問に思わず笑われた、など母親らしい吐露が散見する。長じて、ジョージがハーバード大学の入学を許されたにも拘らず、当時の多くの女性達がそうであったように、リーは大学での勉学を反対された。情操教育とされた長期のヨーロッパ旅行を終えて、19歳でシカゴの弁護士ブレウエット・リーに嫁いだ。盛大なパーティーがグレスナー邸のパラーで催されたことを父親のジョンは誇らしく語り、母親は招待客のお祝い品を目録のように日記に記載した³⁸⁾。しかし、リーの勉学意欲は抑えられず、3人の子を連れ36歳での離婚を経て、独学で犯罪学の勉強を始めるのである。彼女を支援したのは、弟の友人で法医学を学ぶジョージ・バージェス・マグラスであった。犯罪現場や、解剖現場にすすんで出かけたという³⁹⁾。

弟の死が1929年、母フランセスが1932年、病弱だった娘の死が1935年、父ジョンが1936年、マグラスの死が1938年。長年の家族の重圧から解き放たれた思いからか、尊敬するマグラスの死が温めてきた思いに火をつけることに

なったか、想像するしかないが、6代になって、独自のドール・ハウスを使った事件現場検証の訓練方法を編み出すのである。警察官や検視官から集めた実際に起こった事件の資料をもとに、分析し、再構成し、課題として提出している。他殺、自殺、事故など、付属資料の目撃証言と照らし合わせて、集中力と分析力を駆使しながら、犯人を特定する観察眼をみがくというものである。18 (20あったが、2つは失われた。)におよぶ、1フットが1インチに縮小された、ミニチュア・モデルを使った訓練方法であった。

たとえば、リー自身のバスルームと酷似する壁紙が貼られたドール・ハウス「ピンク・バスルーム」(ケースMarch31, 1942)では、清掃員が犯人と疑われるなか、ドアの上部にわずかに残る糸くずや被害者女性の首周りの紐の位置を確認することから、他殺ではなく自殺と認定し、清掃員にかけられた容疑を晴らすというもの⁴⁰⁾。

今日に至っても訓練用に使われていることから、解答を明かされていないケースが多いが、その一つ、「リビング・ルーム」(ケースMay22, 1941)では、グレスナー家に掲げられていた風景画に酷似した絵がドール・ハウスにある⁴¹⁾。両親の理想郷を殺人現場にすることの落差は何を物語っているのだろう。語らないリーに近づく方法はないものか。

グレスナー邸のまやかしの家庭像への批判が表れているという見かたも成り立とう。ドール・ハウスという女性性とそこから逃れられなかった状況が象徴されているという見かたも出来る。さらに別の視点も検討の余地がある。18のドール・ハウス模型の殺人現場の被害者には女性の方が多い(被害男性11人：被害女性13人)。しかも男性の殺害現場は牢獄や酒場、納屋であるのに、女性たちの殺害現場は圧倒的に家庭である。抑圧の被害者というリー像だけではなく、むしろ家庭に閉じこめられ、抑圧された女性達の思いを汲み取った、女性解放への先駆的役割をリーが果たしていたと見ることも可能だ⁴²⁾。

両親は社会的役割を担った家庭作りを日々実践していた。安全で美しい家作りに取り付かれたように奔走していた。その安全で美しく、道徳性を湛え

ていたはずの家庭が犯罪現場として再現され、そこで死体となる人形を何体も作り続けたリーをどう見るべきか。痛々しい人形からは、犯罪への怒りが間違いなく伝わってくる。

ここで、弟の療養のために建てられたニュー・ハンプシャーの夏の別荘を振り返ってみよう。そこには、建築プランを任されていた前述の家具職人、スコットを相手に遊んだ「ファニー」がいる。スコットは子供サイズに合わせたスケールの遊び小屋をグレスナーの子供たちに作っていた。子供たちにも仕事を手伝わせた。中に備える手作り品を完璧に作ることもスコットから学んだ。アーツ・アンド・クラフツ運動を代表する職人からの手ほどきである。のちの完璧なミニアチュア作りを思わせるものだ⁴³⁾。そうした生い立ちを振り返ると、建築模型の発想、家具配置から犯罪の証拠を見つけ出す方法に、建築や内装に関与する可能性をリーに与えてきた生い立ちの成果がみえる。リーが勧めた分析の方法は、空間認識への視点において、建築やデザインの詳細を確認する作業において、家具配置や導線、額の配置や椅子の統一性の考察において、それらが日常会話であったからこそ生まれたものであった。

リー自身は作品が「ドール・ハウス」と呼ばれることを嫌った。それは、犯罪捜査のための教材であり、リーはそれを「難解きわまる死体現場の木の実学習」と名づけた。木の実の固い殻を破ってこそ、真実が手にはいる、という意味をこめてつけられた。あくまでも事件現場の現状維持、訓練された科学捜査の導入、死体解剖の義務付け、医師との共同捜査を目的として掲げている。1930年代、40年代のアメリカで横行した憶測による犯罪捜査の改善に向けてのたゆまぬ、リーの進言こそがもっとも重要な点であろう。そしてそれは当時の官職の汚職を一層する流れと轍を共にしていた⁴⁴⁾。

教材として手作りされた犯罪現場用の見事なミニアチュア家具に、またすべて手作りの衣装やカーテン・レース・敷物に、育った環境の呪縛をみるのはやさしい。たとえば、リーが気をつかったのは、壁紙の柄の選択であった。居住者、つまり被害者の価値観を最も伺えるものとして壁紙を重要視していた。それはまるで両親の姿を髣髴させる。しかし、そうした知識を持ったこ

とが、家庭の閉鎖性を越えるフランスス・グレスナー・リーを生んだこともこの邸宅の遺産なのである。そしてリーにそれを可能にさせたのは、もう一つの母からの遺産、裁縫（刺繍）の力であったことだ。課せられた空間の呪縛を自分の持てる力で脱出した。紅一点、最後は移り住んだニュー・ハンプシャー州の警察署長にまで上り詰めたリーの姿は、19世紀を生きた両親には想像も出来なかったことだろう。

個人の心情を文書に残さないリーの姿は、これも心情を吐露することを拒んだかのような、淡々とした日誌を残した母親フランススを思わせる。殺人現場作りの裏に隠されたリーの心情はミステリーのままだが、リーの教材は今日でも犯罪現場で訓練用に使われている⁴⁵⁾。家庭内暴力、アルコール依存症、売春といった殺人現場に目をつけたその視点は今後もフランスス・グレスナー・リー個人への理解だけでなく、アメリカにおける閉された暴力空間を告発する上でも検討が必要であろう。



「台所」(ケース Wednesday, April 12, 1944)

Corinne May Botz, *The Nutshell Studies of Unexplained Death*, p.184.



「ダーク・バスルーム」(ケースNov. 6, 1896)

Corinne May Botz, *The Nutshell Studies of Unexplained Death*, p.89.

おわりに

以上みてきたように、世紀末アメリカで誕生したグレスナー邸は家人にさまざまな挑戦を課してきた。夫が望んだ理想の居住空間、内装にかかわることで居場所を手にいれた妻。しかし、同じ空間を共有しながら、異なった階級のひとたちには思い至らない夫妻の姿。そして理想とされたその空間を殺人現場に仕立てることで理想の空間を告発する娘。

建築史の変遷、アーツ・アンド・クラフツ運動に代表される美術史の動向、女性をめぐる家庭観の変遷、公私の領域の検討、男性・女性領域の見直し、当時の権力構造、階級構造、ジェンダー構造の実態をこのグレスナー邸だけで語れるとは思わない。しかし、人形の世界とはいえ、犯罪現場となった家庭に踏み込む警察権力こそ、守ろうとした空間の対極にある姿だろう。この実験的なシカゴの都市住宅の成立とその移り変わりには、特殊な家族の事例としてだけでは終わらない、都市生活空間への挑戦と限界、その遺産が見えてくる気がしてならない。

注

- 1) 「矮小化された環境主義」と呼んだのはEileen Boris, “The Social Meaning of Design: The House Beautiful and the Craftsman Home,” in *Art and Labor: Ruskin, Morris, and the Craftsman Ideal in America*, Philadelphia: Temple University Press, 1986, pp.53-81. p.78. アーツ・アンド・クラフツ運動のアメリカ受容に関しては以下を参照した。T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1981. Richard Guy Wilson, “American Arts and Crafts Architecture: Radical though Dedicated to the Cause Conservative,” in Wendy Kaplan ed, “*The Art that is Life*”: *The Arts and Crafts Movement in America, 1875-1920*, Boston, New York, Toronto and London, Little Brown and Co., 1987, pp.101-131. Janet Kardon, ed. *The Ideal Home: The History of Twentieth-Century American Craft 1900-1920*, New York: Harry N. Abrams, Inc. Publishers, 1993.
- 2) 建築家よる設計過程を対象にした研究は、香山壽夫, 『建築形態の構造——ヘンリー・H・リチャードソンとアメリカの近代建築』東京: 東京大学出版会, 1988. 外壁を「実」、内部を「虚」の形態とよび、その対立と対比構造がリチャードソン建築の特徴と見なしている。本論では「虚」にあたる空間利用の文化論を試みたい。使用した資料は以下である。Glessner family papers (manuscript), 1851-1959, John Jacob Glessner collection (photographs), in Chicago History Museum, Chicago IL. (以下CHM) ここに40年にわたる妻フランセスが残した日誌 (Frances Glessner, *Journal* July13, 1879-May4, 1917) が保管されている。(以下Frances, *Journal*) グレスナー邸は現在博物館となっている。Glessner House Museum, 1800 S. Prairie Avenue, Chicago IL. 60616, <http://www.glessnerhouse.org> には一部基本資料が公開されている。(以下GHM), フランセスが所属したフォートナイトリー (シカゴの女性クラブ) に関しては, Fortnightly of Chicago Records, 1869-2006, Newberry Library, Chicago, IL. グレスナーの孫による家系図および回顧録, Percy Maxim Lee and John Glessner Lee, *Family Reunion: An Incomplete Account of the Maxim Lee and John Glessner Lee*, Privately Printed, 1971.
- 3) *Chicago Evening Journal*, July 10 1886. (GHM) あまりの建築様式の違いに、事前に許可を得てから着工すべきだと怒る住民たちの様子を伝えている。
- 4) ジョンは子供たちに家の歴史と調度品の記録を残している。もとは“My dear George and Frances”で始まる子供宛の手紙であった (March1923)。“The House at

- 1800 Prairie Avenue, Chicago”, と “1886 H. H. Richardson Architect” の 2 葉を収録し、長男ジョージが撮影した写真を掲載して出版された。本論が使用したのは1978年シカゴ建築家協会発行版。(以下 John, *The House*), John J. Glessner, *The Story of a House*, Chicago: Glessner House Museum, 2011. に再収録されている。
- 5) Robert Judson Clark and Wendy Kaplan, “Reform in Aesthetics: The Search for American Identity,” in Kaplan ed., pp.78-100, Judith A. Barter and Monica Obniski, “Chicago: A Bridge to the Future,” in *Apostles of Beauty: Arts and Crafts from Britain to Chicago*, The Art Institute of Chicago, New Haven and London: Yale University Press, 2009, pp.151-188.
 - 6) “Modern Gothic: The Search for Truth and Beauty: 1873-1880,” in Sharon Darling, *Chicago Furniture: Art, Craft & Industry, 1833-1983*, The Chicago Historical Society, New York and London: W. W. Norton & Company, 1984.
 - 7) *Frances, Journal*, May 9, 1886, (CHM). (ジャーナルは日曜日に一週間を振り返って書かれたため、4日のヘイマーケットの記述の記載日がずれる。)
 - 8) 「シンプリシティとプロポーシオン」がリチャードソン建築の最大の強みとジョンが語るの、John, *The House*, p.5. *Frances, Journal*, Nov. 14, 1885, *Journal*, Thursday, Oct. 21, 1886, (CHM).
 - 9) Mariana Griswold van Rensselaer, *Henry Hobson Richardson and His Works*, Boston, Houghton Mifflin, (1888), Mineola, N.Y.: Dover Publications, Inc, 1969. Elaine Harrington and Hendrich Blessing (Photograph), *Henry Hobson Richardson: J. J. Glessner House, Chicago*, Tübingen/Berlin: Ernst Wasmuth Verla, 1993, pp.6-13.
 - 10) Van Rensselaer passim, 引用はHarrington p.12.
 - 11) Van Rensselaer, p.22. 「蒸気船の内装も手がけたい」と続けている。John, *The House*, p.12.
 - 12) “John Glessner” in “The Glessner Family,” (GHM), *Family Reunion*, pp.307-387.
 - 13) Harrington and Blessing, p.9.
 - 14) John, *The House*, p.11.
 - 15) John, *The House*, p.11. *Frances, Journal*, May 15, 1885, (CHM).
 - 16) Van Rensselaer, Chapter V, “European Journey”, pp.27-28. Catherine Lynn, *Wallpaper in America: From the Seventeenth Century to World War I*, New York: Norton, 1980, Chapter 16.
 - 17) Harrington and Blessing, p.11. John, *The House*, p.5.

- 18) Juliet Kinchin, “Interiors: Nineteenth-Century essays on the ‘masculine’ and the ‘feminine’ room,” in *The Gendered Object* ed. By Pat Kirkham, Manchester and New York: Manchester University Press, 1996, pp. 12-29.
- 19) John, *The House*, p.3.
- 20) Carlo J. Callahan, “Glessner, Frances MacBeth, Jan1, 1848-Oct20, 1932,” in Rima Lunin Schultz and Adele Hast eds, *Women Building Chicago, 1790-1990---A Biographical Dictionary*, Bloomington & Indianapolis, Indiana University Press, 2001, pp.320-323. *Family Reunion*, pp.307-387.
- 21) Sarah A. Leavitt, *From Catharine Beecher to Martha Stewart: A Cultural History of Domestic Advice*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002, Boris, pp.153-81. フランセスが主導権を取ってデザインの変更, 調度品の選択をする様子は, Frances, *Journal*, Jan2, 1887, Jan23, 1887, March 6, 1887, Apri,21,1887, (CHM) に 顕 著 である。
- 22) 1891年からフランセスはシカゴ美術館でディレクターも勤めた。美術の目利きとして通っていたフランセスはシカゴ万国博覧会も開幕以前に特別の案内で見学が出来た。Callahan, “Glessner, Frances Macbeth,” in *Woman Building Chicago*, James Gilbert, *Perfect Cities, Chicago’s Utopias of 1893*, Chicago and London: University of Chicago Press, 1991, pp.76-77.
- 23) Callahan, “Glessner, Frances MacBeth” in *Women Building Chicago*. 「月曜朝の読書会」での交流の様子は, *The Fortnightly of Chicago: The City and Its Women 1873-1993*, Ed. Fanny Butcher, Chicago: Henry Regnery Co., 1973, pp.167-68. フランセスが中心になって女性達のネットワークを作り上げる様子を評価している。刺繍が女性役割を保持しながら, 自立を担保できる機会であったと指摘するのは, Anthe Callen, *Women Artists of the Arts and Crafts Movement*, New York: Pantheon Books, 1979, pp.95-135.
- 24) Ann Gere, *Intimate Practices: Literacy and Cultural Work in U.S. Women’s Clubs, 1880-1920*, Urbana: University of Illinois Press, 1997, Mary Corbin Sies, “The Domestic Mission of the Privileged American Suburban Homemaker, 1877-1917: A Reassessment,” in Marilyn Ferris Motz and Pat Browne eds., *Making the American Home: Middle-Class Women & Domestic Material Culture*, Bowling Green, Ohio: Bowling Green State University Popular Press, 1988, pp.193-210
- 25) John, *The House*, p.2. Frances, *Journal*, Dec4.1887, “First Sunday in our new home---

- 1800 Prairie Ave.” (CHM).
- 26) John, *The House*, p.3. フランススの日誌にはアメリカ志願兵からのセーターの礼状が残されている。Herman Whitmore to Frances Glessner, July 1, 1917, The Glessner family papers, Box6, letter file 1917-21, (CHM).
- 27) Louise L. Stevenson, *The Victorian Homefront: American Thought and Culture 1860-1880*, New York: Twayne Publishers, 1991, 男女領域、公私領域の重要性とその視点を越える試みは、Linda K. Kerber, “Separate Spheres, Female Worlds, Women’s Place: The Rhetoric of Women’s History,” *The Journal of American History*, Vol. 75, No1, June 1988, pp.9-39, Mary P. Ryan, “The Public and the Private Good: Across the Great Divide in Women’s History,” *Journal of Women’s History*, Vol.15, No.2, Summer 2003, pp.10-27, Joan B. Landes, “Further Thoughts on the Public/Private Distinction,” *Journal of Women’s History*, Vol.15, No2, Summer, 2003, pp.28-39, Grace Lees-Maffei, “Introduction: Professionalization as Focus in Interior Design History,” *Journal of Design History*, Vol.21 No1, 2008, pp.1-18を参照。
- 28) Kinchin, 前掲書, Stevenson, 前掲書。
- 29) 「オープン・ハウス」と呼んだのはJohn, *The House*. P. 2.
- 30) こうした空間作りはのちにフランク・ロイド・ライトに引き継がれるという。ただそこでは極度にプライベートな空間となったと指摘されている。Cheryl Robertson, “House and Home in the Arts and Crafts Era: Reforms for Simpler Living,” in Kaplan ed., pp.336-357, Robert Twombly, “Saving the Family: Middle Class Attraction to Wright’s Prairie House, 1901-1909,” in *American Quarterly*, Vol.27, No 1, March 1975, pp.57-74.
- 31) “Servants” in GHM. クローゼットに関しては John, *The House*, p.12.
- 32) “Servants” in GHM.
- 33) “Servants” in GHM, 御者にはのちにアフリカ系アメリカ人が採用されたという。
- 34) Frances, *Journal*, Aug.2, 1891, (CHM). こうした退職のかたちがグレスナー家特有であったか、否か、召使関連の資料に限られているため、全体像のなかでの把握は難しいが、全員同時期の退職願は特筆すべきだろう。ただし、全国を対象としたアイルランド移民女性の家政婦調査では、一人で雇われていた場合でも、カトリック教会を通して、強い移民同士の連帯感を持ち続けたという。Margaret Lynch-Brennan, *The Irish Bridget: Irish Immigrant Women in Domestic Service in America 1840-1930*, Syracuse University Press, 2009. 労働条件のよい職場を探す

ネットワークがあってこそその退職であったと予測できる。1870年から1930年にかけての調査では、女性の全未熟練労働の50%を占めていた家政婦が、1930年代には20%へとその割合を大きく減らしている。David M. Katzman, *Seven Days a Week: Women and Domestic Service in Industrializing America*, New York: Oxford University Press, 1978. 口約束による労働条件のあいまいさ、要求される濃密な主従関係、プライバシーのなさから住み込みは嫌われ、決して条件が良いとはいえない工場労働が次第に好まれていった。こうした大きなながれの中にグレスナー家の使用人たちもいた。濃密な主従関係が嫌われていく時期とされるが、グレスナー邸においては、後述のエマの手紙に見るように、より人間的な主従関係を使用人が要求している。むしろ、使用人を名前ではなく、役職名で日誌に記載していくのは、フランススのほうであった。

- 35) Emma Siniger to Frances Glessner, Sep. 28, 1891, 切々と訴えるSinigerの様子はSep. 12, Sept 18, 1891の手紙にもみられる。すべてフランススの日誌に糊付けされ残されている。The Glessner family papers, Box3, (CHM). Hellen C. Callahan, “Upstairs-Downstairs in Chicago 1870-1907: The Glessner Household, *Chicago History*, 6.4 (winter 1977/1978) pp.195-209, p.208.
- 36) 『*The Rocks*』 (Printed Booklet), The Glessner family papers, Box 16, Folder, 14, (CHM). Frances, *Journal*, Nov8, 1887, (CHM). 「ミス・ファニー」, 「マスター・ジョージ」と呼ぶことを強要した。
- 37) Laura J. Miller, “Denatured Domesticity: An Account of Femininity and Physiognomy in the Interiors of Frances Glessner Lee,” in Hilde Heymen and Gulsum Baydar, *Negotiating Domesticity: Spatial Productions of Gender in Modern Architecture*, London and New York: Routledge, 2005, pp.196-212. 本論では言及していないが、ジョージ (1871 - 1929) はビジネスで成功をおさめ、ニュー・ハンプシャーに移り住み州議員を勤めた。アマチュア写真家であり、火災報知機の研究でも知られる。残された自宅記録写真の数々、火災から家屋を護ることへの没頭は、グレスナー家の邸宅への執着をみせている。
- 38) Frances, *Journals*, Oct.31, 1886, Nov.7, 1886, (CHM). John, *The House*, p.7. Frances, *Journal*, Friday, Feb 11th, 1898, (CHM). *Family Reunion*, pp.387-412.
- 39) Corinne May Botz, *The Nutshell Studies of Unexplained Death*, New York: The Monacelli Press, 2004.
- 40) Botz, p.221.

- 41) Botz, pp.166-167.
- 42) Botz, “Killing the Angel in the House: The Case of Frances Glessner Lee,” in *The Nutshell Studies of Unexplained Death*, タイトルの「天使を家で殺すこと」はヴァージニア・ウルフの言葉から。p.39.
- 43) スコットは3/4 サイズの二部屋の小屋を作った。Okusana Paluch, *Issac Scott: American Master*, Chicago: Glessner House Museum, nd. (pamphlet), Glessner House Museum, *Frances Glessner Lee: ‘A Wonderfully Rich Life’: An exhibition on the many facets of the life of Frances Glessner Lee, 1878-1962,* February- August 2005. (pamphlet) タイトルは「振り返るとなると豊かな人生を私は送ってきたことでしょう。」と、リーが息子に晩年書いた手紙からの引用。この展示を解説するパンフレットには、リーの内面的な考察や感情を伺える記述はない。
- 44) リーはのちに私財を投じて、ハーバード大学法医学教室の設立、関連図書の購入を可能にした。マグラスの名を冠した図書館となっている。同大学のセミナーに参加した推理作家、E. S. ガードナーはその著作*The Case of the Dubious Bridegroom* (怪しい花婿) (1949) において「精密機械のような頭脳の働きに対する深い驚嘆のしるしとして、…本書をニュー・ハンプシャー州警察の警部にして、かつてペリー・メイスンの思考を混乱に陥れた数少ない女性の一人、フランセス・G・リー夫人におくる。」と絶賛している。田中融二訳『怪しい花婿』東京：早川書房、昭和51年。 *Family Reunion*, p.407.
- 45) Botz, p.31. リーの教材は今日メリーランド法医学協会が所蔵し、年二回のセミナーが行われ警察の科学捜査に利用されている。彼らの学ぶ様子は*Of Dolls & Murder*, Written and Directed by Susan Marks, Seminal Films, 2012. 現代芸術を思わせる作品群という指摘もあるがリー自身は決して芸術作品として制作したのではないことに留意すべきであろう。